退官者のひとこと

奈文研での時を振り返って

綾村 宏さん

この３月で、いよいよ奈文研を定年退職することになった。就職の際、文化財関係の職場を希望していたので、それに沿った仕事に携われたことの幸せをしみじみ感じている。

東京での勤務の２年余を除き、平城宮跡発掘調査部と歴史研究室でほぼ半々勤務した。平城・史料調査室では木簡の調査と平城宮京域の発掘調査、歴史研究室では南都諸大寺など伝来の古文書・経巻など書跡資料の調査と、文化財調査の最前線にいさせてもらったことになる。

発掘調査未経験の新入所員にとり、研修現場での巨大な一木造りの内裏の井戸の出現（いま復原整備展示されている）による衝撃を皮切りに、宮跡庭園、大嘗宮遺構、難解な東院地区など、いまも記憶に残る現場が多い。現場での木簡の出土も結構経験した。木簡では、やはり長屋王家木簡の発見に関わったことが最大の出来事であろう。発掘現場班ではなかったが、次々運び込まれる厖大な量のトロ箱中の泥にまみれた木簡の洗い出し、整理、釈文作成の作業を行う整理室の興奮と緊張感は忘れられない。

一方、書跡資料の調査は、南都の諸寺院で継続して行っている奈文研創設以来の仕事である。その業務を担当し、次の世代に引き継ぐことが出来た。文化遺産“古都奈良の文化財”は、土地、建物、そして本質的には信仰の対象である品々が一体として、現地に存在していることこそ文化遺産としての大きな価値といえよう。そのうちの書跡資料につき実態を明らかにしようと調査を行ってきた。文化財そのものは、数百年以上伝来してきたものである。そのうちの数十年間でも関わりを持てたこと、それが仕事の対象であったことにつき嬉しく思っている。

独法化以降、世の中のテンポがますます速くなってきた。手間ひまのかかる文化財の仕事と時間との兼ね合いが気になるところである。

（文化遺産研究部長　綾村 宏）